

折 伏 要 文 (1)

法華講夏期講習会 第一期(平成18年5月28日)

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会の第一期に当たりまして、皆様方には多数の御参加、まことに御苦労様でございます。

この夏期講習会で^{つちか}培われたたくさんの知識と体験、これらは今後の皆様方の信心の上において、まことに大きな力になっていくものと思います。

したがって、この夏期講習会におきましては、皆様方も真剣に取り組んでいただいて、また今日は第一期の方々でありますから、まだ申込みをしておられない方々がおられましたら、ぜひとも講中の方々に参加を推進・啓蒙していただきたいと、このように存ずる次第であります。

さて、私も前御法主日^つ願上人^{だいがわり}猥下の後を継がせていただきまして、昨年十二月十六日に総本山に入り、そして本年四月に代替法要をさせていただいたわけではありますが、それからまだ半年も経っておりません。

私も総本山に入った当初は、いろいろと戸惑うことがたくさんありました。けれども、そうした中で様々な行事や時間帯等についても、少しずつではありますけれども、^な慣れてきたような状況であります。

そんな状況の中で今回、私にとりましては第一回の講義を行うことになったのであります。そこで本年度の私の講義のテーマを「折伏」といたしました。テキストには折伏の要文を^あ挙げまして、これを皆様方と共に勉強していきたいと考えた次第であります。

今、宗門が僧俗一致してなすべきことは、やはり前御法主日^{じ ゆ}願上人猥下から賜った「地涌倍增」と「大結集」、これを何としても果たしていくことではないかと思えます。その「地涌倍增」と「大結集」を果たしていくために絶対に欠かせないのが折伏であります。つまり、折伏の^{ともな}伴わない地涌倍增はないわけでありますから、地涌倍增の絶対要件は折伏であります。また同時に、大結集も同じ意味がありまして、折伏の伴わない大結集は、それは単なる数集めであります。それではやはり日願上人猥下が意図せられたところとは反してしまうと、このように考えます。

本年は「決起の年」であります。「決起」とは文字通り、決意して行動を起こすことです。では、いかなる行動を起こすのかと言えば、それは明らかに広布への闘いであり、平成二十一年の御命題^{めいだい}達成に向けて前進をしていくことでもあります。その御命題の主たるテーマというのは、まさしく「地涌倍增」と「大結集」、つまり折伏であるということでもあります。

そういう意味から私は、本年度は折伏の要文を挙げて、その要文を中心に話をしていきたいと考えた次第であります。

さて、テキストの一ページを開いていただきますと、

法華經

とあります。法華經の中にも、折伏についての御教示がありますので抽出をした次第であります。

それから、三ページを開きますと、

御書

とあります。主に御書を中心に話をしていきたいと思いますが、その前に、法華經の中には、どのように説かれているかということについて話をしたいと思います。

御承知の通り法華經というのは、釈尊が本懷として説かれた經典であります。したがって、法華經八年の説法というものは、まさに重要中の重要であり、それ以前の四十二年は方便權教であります。

この法華經の精神とは何かと言うと、これは天台も言っておりますけれども、

「法華は折伏して權門の理を破す」(玄義會本下 五〇二頁)

ということです。權門というのは、權りの教えということで爾前權教のことです。つまり、法華經の精神、法華經の思想そのものが折伏にあるわけです。この折伏というのは、一切衆生を救済する、すべての人たちを幸せにしていく慈悲行なのです。このような意味から法華經の精神というのは、すべてを救っていくことなのです。

これは法華經そのものも、そうではありますが、仏様の出世の本懷そのものがそこにあるわけです。仏様は何のために出現せられたかと言えば、これは一切衆生を救済するためなのです。仏様は、自分の自己満足のために世に出て法をお説きあそばされたのではないのです。開示悟入の四仏知見ということがありますけれども、仏様は一切衆生を救っていくというお命をもってこの世に出現せられたわけです。

つまり、衆生を救っていくということは何かと言えば、それは今で言えば折伏であります。ですから法華經の精神は、仏様がまさになされようとしたこのお命と全く同じであります。よって「法華は折伏して權門の理を破す」と、このように仰せられているわけであります。

そういうことから、まず仏様の御出現の目的ということをよく知って、そして各要文を拝読していきたいと思います。

まず、

法師品第十

でありますけれども、この『法師品』には、法華經の弘通の功德が説かれておまして、皆様方も御承知の「五種法師」、あるいは「已今当の三説」、あるいは「衣座室の三軌」などが説かれておるわけです。

そこで、

「善男子、善女人、我が滅度の後、能く竊に一人の為にも、法華經の、乃至一句を説かん」

とあります。ここに「善男子、善女人」とありますが、善男子とは、仏法を信ずる在家の男性であり、善女人とは、仏法を信ずる在家の女性のことです。つまり、善法を信じていることから「善男子、善女人」と、このようにおっしゃっているわけです。

それから「我が滅度の後、能く竊に一人の為にも、法華經の、乃至一句を説かん」というように、法華經を説く方、つまり折伏をする方は、

「^{まさ}当に知るべし、是の人は則ち如来の使なり」

とあるように、如来の使いの者であると仰せです。つまり仏様の代理として、仏様のように振る舞う者であるということです。この「如来の使」とは、まさに仏様の意を体して、仏様がなすべきことを行っていく者をいうのであります。

「如来の所遣^{しよけん}として、如来の事^じを行ずるなり」

「如来の所遣」とは、仏より遣わされた者という意味ですから、言うなれば使いと同じ意味であります。仏様から遣わされた者として「如来の事を行ずるなり」と、このように説かれております。

この「事」ということは、どういうことかと言いますと、衆生に利益を得せしめるために、仏様がいろいろなことをなされることをいうのです。

また、この「事」に対する語として「理」という語があります。特に、天台の「理行」に対して、大聖人様の仏法を「事行」と言いますが、その大聖人様の仏法を実践修行する意義が、この「事」という中に存するわけであります。

ですから、仏様が衆生に対して様々な功德を得せしめんがために説かれた修行を、我々が、理屈だけではなくして、実際に行っていくということが「如来の事を行ずるなり」ということになるわけであります。

「何に況^{いか}んや、大衆^いの中に於^いて、広く人の為^{だいしゆ}に説かんをや」(法華經三二一^{おい}三行目)

前の御文では「竊^{ひそか}に一人の為にも」とあり、さらに「一句を説かん」とありましたように、わずか一人のために一句を説くことにおいてさえ、大きな功德があると仰せられました。そこで、このところでは「ましてや、大勢の人に対し、法華經を広く説く功德はいかばかりであろうか」と説かれるのであります。

折伏をすることは、まさに仏様の使いであり、仏様の所遣であり、仏様の事を行ずる者であると、このようにおっしゃっているわけであります。ですから、折伏をする者は皆、仏様の使いなのです。

仏様は、滅不滅の相をもってすでにお亡くなりになっておられるけれども、その仏様の御遺訓を拝して、仏様のなされることを行っていくところに、大きな功德が存するわけであります。

仏様の御遺訓に反していたら、仏様の言いつけと違うことをしていたならば、これは功德が戴けないのです。ですから、仏様の仰せのごとくに折伏を行ずる者には、必ず功德が生じてくるということでもあります。

次が、また『法師品』の御文であります。

「若し善男子、善女人有^もって、如来の滅後に、四衆^{ぜんなん}の為^しに、是^{ぜんによにん}の法華經を説かん^{ため}と欲^こせ^{ほつ}

ば、云何が^{いかん}応に^{まさ}説くべき」

この「四衆」というのは、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷のことであります。この「比丘」とは、お坊さんのこと。「比丘尼」は、尼さんです。それから「優婆塞」は、男性の御信徒。そして「優婆夷」は、女性の御信徒のことであります。

これを四衆と言うわけでありましてけれども、この四衆のために、どのようにして法を説いていったらいいのかということでもあります。

「是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に^こ広く斯の経を説くべし」

これが「衣座室の三軌」であります。仏様の滅後に法華経を弘通する三つの方軌が、ここに示されているわけです。「方軌」とは規則という意味で、簡単に言うとお手本ということです。その「衣座室の三軌」が、「如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐す」の三つであるということです。

そこで、

「如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心^{これ}是なり」

とあるように、「如来の室に入る」とは、大慈悲心を起こすこと。つまり自らの命の中に一切衆生を救済していこうという慈悲の心を起こすことです。

これは折伏にとっては、極めて大事なことであります。相手を本当に救っていこうという心がないと、やはりその命は相手にどうしても伝わっていきません。ですから、慈悲の心を持って「この人を何としても救っていく」「あの人の不幸を何としても打ち破っていく」、そういう慈悲の心を持つべきであるということでもあります。ですから、仏様がおっしゃる「如来の室」とは何かと言うと、この大慈悲心のことをおっしゃっているということでもあります。

それから、

「如来の衣とは^{にゅうわにんにく}柔和^{これ}忍辱の心是なり」

この「柔和」とは、素直な心で正法を持つことです。「忍辱」とは、いかなる^{ぶじよく}侮辱や批判、迫害や中傷に対しても一切動揺しない。そしてまた、いかなる逆境の中にあっても、それを乗り切っていくということです。これが「如来の衣を着る」ということです。

ですから、折伏をしていけば非難・中傷を受けるのは当然でありますけれども、そこで^{くじ}挫けてしまつて、^お怖じけてしまつて臆病風を吹かせてはだめなんです。どんなことがあっても、それを乗り切っていくという、勇氣ある行動が必要なのです。

次に、

「如来の座とは一切法空是なり」

とあります。この「一切法空」とは経文に、

「諸法空を座と為す」(法華経 三三二^なべ)

とありますけれども、簡単に言うと、一切の煩惱に^{とら}執われないということです。つまり、すべてに執着せずに大聖人様の教えを弘通していくことが「一切法空」という心であります。

これをもう少し具体的に言いますと『御義口伝』の中に、

「座とはふしゃくしんみょう不惜身命の修行なれば空座に居するなり」(御書 一七五〇頁)

と説かれるように、一切法空とは不惜身命、つまり命を惜しまず折伏をしていく、そういう心であると大聖人様がおっしゃっているのです。

ですから、折伏をするときには、まず大慈悲心を持つこと。そして、どのような非難・中傷、迫害にも耐える強盛な信心を持つこと。そして命を惜しまないという勇気を持つこと。この三つを持って折伏に臨むべきであるということでもあります。

「是の中に安住して、しか然して後ふけだいに不懈怠もつの心を以て、もろもろ諸の菩薩、及び四衆の為に、
く是の法華経を説くべし」

と、このように仏様はおっしゃっているわけです。ですから、折伏ができないというときには、この「衣座室の三軌」をもう一度、振り返ってみる必要があります。本当に自分に勇気があったのか。あるいは本当に相手を救おうという心があったのか。あるいはどんな非難・中傷にも耐え、途中で諦めない心があったのか。これらを一つひとつ反省していけば、どこかに自分が折伏についてつまずいた原因が見出だせるのです。

ですから「衣座室の三軌」ということは、まさに弘経の方軌、つまり法を弘めていく、折伏をしていくときのお手本であります。これを常に心していけば、必ず折伏を成就することができるわけがあります。

では、次にまいります。

随喜功德品第十八

この『随喜功德品』には、皆さん方も御承知の通り、五十展転の随喜の功德が説かれているのです。

「阿逸多、汝且これく是を觀ぜよ」

この「阿逸多」とは、みろくぼきつ弥勒菩薩のことです。

「一人に勸めて、往いて法を聴かしむる功德此の如し」

ここに「法を聴かしむる功德此の如し」とありますが、実はこの法華経にはすばらしい功德があるということが、この御文の直前に説かれております。かいつまんで言いますと、

「法華経を聴いた人の功德というのは、まず利根にして智慧が湧いてくる。それから、声が出なくなることはない。口の息が臭くない。舌は常に病がなく、口にも病がない。そして、歯が黒くなったり黄色くなったりもせず、また欠けたりもしない。唇は垂れておらず、縮んでおらず、厚からず大きからず。鼻は曲がっておらず長からず(取意)」(法華経 四六九頁)

と、このような功德が具わってくるということが説かれているのです。そしてまた、

「そのような人は、次もまた必ず善い処よところに生まれてくる(取意)」(同 四七〇頁)

と、このように法華経の中に説かれているのです。

ですから「往いて法を聴かしむる功德此の如し」とある「此の如し」というのは、今言ったような功德が、たった一人のために法を説くことによってでも具わってくるということでもあります。

そこで、

「何に況んや、一心に聴き、説き、読誦し、而も大衆に於て、人の為に分別し、説の如く修行せんをや」(法華經四七〇章五行目)

と。ですから、一人のために法を説くだけでも、それほどの功德が具わってくるのであるから、ましてや大衆のために法を説くということになれば、それはとても計り知れないほどの大きな功德があるということです。つまり、折伏の功德というものは、まことに甚大であると、このようにおっしゃっているわけでありませう。

私たちは、折伏をすることによって過去遠々劫以来の様々な罪障を消滅することができるのです。これには不輕菩薩の例があります。我々、本未有善の衆生は、過去世において様々な罪障を背負ってきています。しかし、その罪障を折伏によって全部打ち消していくことができるのです。折伏をして種々の迫害、難を受けることによって、ますます信心強盛になり、そして難を受けることによって様々な過去世の罪障を滅していくことができると、このように法華經の中には説かれているわけです。このことを我々は、よく知らなければならぬのであります。

次が、

薬王菩薩本事品第二十三

であります。この『薬王菩薩本事品』の中には、

「我滅度後。後五百歳中。広宣流布。於閻浮提。無令断絶」(法華經 五三九章)

という有名な經文があるのです。つまり、

「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむること無けん」(同)ということ、広宣流布の達成する時が必ず来るということが、法華經の中に説かれているのです。

しかし、ここで大事なことは、我々の努力なくしては広宣流布は達成しないのです。ですから、經文には広宣流布を達成する時が必ず来るとあっても、我々が折伏行に励まなければ、その時はどんどん先へ先へと延びていってしまうのです。

したがって、我々の代で広宣流布を達成しようとしていく心意気、その信心が尊いのです。ですから、我々が努力をするということを忘れてしまつてはだめだということです。

さて、この『薬王品』の中に、

「善男子、汝能く釈迦牟尼仏の法の中に於て、是の經を受持し、読誦し、思惟し、他人の為に説けり。所得の福德、無量無辺なり」

とあります。「是の經を受持し」とは、法華經を受け持つこと。それから「読誦し」とは、読み、誦すること。「思惟し」とは、心をつにして静かに考察し、仏様を一心に念じて救済を願うことです。そして「他人の為に説けり」とは、他人のためにこの法を説くということです。その「所得の福德」、つまり得るところの福德は、まさに「無量無辺なり」、すなわち計り知れないほどの功德がそこに存する、折伏の功德は無量無辺であるということでありませう。

しかも、

「火も焼くこと^{あた}能^{ただよ}わず、水も漂^{ただよ}わすこと能^{ただよ}わじ」

と、このようにおっしゃっているのです。妙法蓮華經の功德は依正不二の原理によって、つまり妙法の功德は、自然の力がそこに^{はたら}用いて、そして火も焼くことができず、水も漂わすことができない、そういう大きな功德が必ず生じてくるということです。諸天善神の^{はたら}用きが、そこに必ず出てくると、このようにおっしゃっているのです。

「汝の功德は、千^{とも}仏^{とも}共に説きたもうとも^{つく}尽さしむること能^{ただよ}わじ」(法華經五三八^ぎ一行目)

つまり、あなたの功德は、千人の仏様が説いても、それでもなお尽くすことができないほどの大きな功德がそこに存しておると、このようにお説きになっておられるのであります。

以上、法華經の中の折伏に関する要文のいくつかを挙げた次第であります。

次に、御書の部に入ります。最初が、

一念三千法門

であります。『一念三千法門』には、

「妙法蓮華經と唱^{とな}ふる時^{しんしょう}心性の如^{あら}来^{あら}顕^{あら}はる」

この「心性の如来」というのは、我々衆生の命の中に本来的に具わっている仏の心をいうのです。つまり、仏性のことです。

この御文の意は、どういうことかと申しますと、妙法蓮華經と唱えることによって御本尊様と我々が^{きょうち みょうごう かのうどうこう}境智冥合、感応道交するということです。すなわち感応道交の「感」は、衆生の機感、「応」は、^{のうおう}仏の能応です。つまり、これらが一道に交わって我々の命の中に仏界が現れてくるということです。ですから、妙法蓮華經と唱えるときに、^{みょうぶく}冥伏していたところの仏性が必ず現れてくるということです。

「耳にふれし類は無量^{あ そう ぎ こう}阿僧祇劫の罪を滅す」

ここに「無量阿僧祇劫」とありますが、この「阿僧祇」とは無数の意で、「劫」は極めて長い時間ということです。つまり、これは計ることも数えることもできないくらい長い時間ということです。

したがって、無量阿僧祇劫という長い時間の様々な罪を、妙法蓮華經が耳に触れることによって滅していくことができると、このようにおっしゃっているのです。

「一念も随喜する時即身成仏す」

ましてや、妙法を唱えて一念も随喜の心を起こすならば、まさに即身成仏していくということです。

それから、この後が大事なのです。

「縦^{たと}ひ信^{しん}ぜずとも種^{しゅ}と成^{じゅく}り熟^{じゅく}と成^{じゅく}り必ず之に依^{これ}って成^{しん}仏^{でん}す」

これは聞法の功德を説いているわけでありまして。ですから、たとえ信じなくとも成仏すると仰せられているのです。

例えば、他の人に向かって折伏をするけれども、相手は耳を塞いでこちらの話を聞こうとしない場合があります。しかし、話をすることによって、相手の^{しんでん}心田に妙法が植えつけられるわけです。つまり、耳を通して下種をするのです。妙法を聞かせることによって、それが、いづれ^{しゅ}種^{じゅく}となり熟^{じゅく}と

なって成仏をしていくのであると、このようにおっしゃっておられるのです。

我々は、とかく折伏をしても相手が話を聞いてくれないから「あの人はもうだめだ」と、このように勝手な判断をしてしまいますけれども、そうではないのです。聞法下種ですから、法を聞かせる、相手の耳に触れさせることによって、それが必ず種となるということをおっしゃっているのです。

ですから、相手が話を聞こうが聞かまいが、法をしっかりと説いていかなければだめなのです。それを我々は、どうしても自分の勝手な判断で、相手の本当の心が判らないまま、途中で折伏を諦めてしまうのです。あるいは、ひどい人になると「あの人は、いくら言ってもだめですよ」と、勝手に自分で折伏を退いてしまう。このような人はいないと思いますが、これは本来の姿ではないのです。

大聖人様が「縦ひ信ぜずとも種と成り熟と成り必ず之に依って成仏す」とおっしゃっておられるのでありますから、我々は多くの人々の心田に妙法を植えつけていかなければならないのであります。つまり、妙法を耳に触れさせていくことが大事なのです。

「妙楽大師の云はく『若しは取若しは捨』

「若しは取」とは、これは私たちの話を純粋に聞いてくれる順縁の人のことです。それから「若しは捨」とは、これは話など聞きたくないという逆縁の人のことです。

「耳に経て縁と成る、或は順或は違、終に斯に因って脱す』云云」。

ですから、相手が話を聞こうが聞かまいが、耳に触れていけば、それが縁となって、順縁の人も逆縁の人も、いずれ必ず成仏をしていくのです。「終に斯に因って脱す」というのが成仏をするということです。したがって、

「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」(御書 六六八頁)

と仰せのごとく、妙法をしっかりと説いていかなければだめなのです。

我々の日常の折伏の中に、このようなことが欠けてはいないか。もしも、思い当たるところがあったとするならば、この御妙判をよく拝して、多くの人に下種結縁をしていただきたいと思います。要するに、たくさんの人に下種をしていくことが大事であるということです。

「日蓮云はく、若しは取若しは捨、或は順或は違の文肝に銘ずる詞なり」

と、大聖人様は妙楽大師の言葉を引かれて、このようにおっしゃっているのであります。

「法華經に『若有聞法者』等と説かれたるは是か」

この「若有聞法者」は『方便品第二』の文です。すなわち、

「若し法を聞くこと有らん者は 一りとして成仏せずということ無けん」(法華經 一一八頁)

ということです。法華經にこのように説かれているのは、まさにこのことをおっしゃっているのかということです。

「既に聞者として説かれたり、観念計りにて成仏すべくば若有観法者と説かるべし」

この「若有観法者」というのは、「若し法を観ること有らん者は」という意味です。ですから、見ていただけではなく、法を聞かなければだめだということです。

我々が信心をしている姿を、相手がただぼんやり見ているだけでは折伏にならないのです。皆さん方の周りにも、自分が日蓮正宗の信心をしているということを知っている未入信の方がいるでしょう。家族や親戚、友人、知人、あるいは隣となりの人などで、まだ信心をしていない方がおられるでしょう。そういう人たちに対して、ただ自分が信心をしている姿を見せているだけではだめなんです。そういう方々に、耳をもって妙法を聞かしめることが大事なのです。

聞く者の功德というのは広大であるけれども、しかし見ているだけでは功德はないのです。ですから、このことを「観念計りにて成仏すべくば若有観法者と説かるべし」と、つまり、もし観念だけで成仏するならば、この経文は「若有観法者」と説いてしかるべきであろうが、しかし、そうではないと言われるのです。ですから、法を聞かせるということが大事なのです。

「ただ天台の御料簡りょうけんに十如是と云ふは十界なり」

これは『御講聞書』の中に、

「されば十如是と云ふは十界なり。十界そく即十如是なり。十如是は即すなわち法華經の異名い みょうなり云云」
(御書 一八二七〇)

と、このようにあります。また『御義口伝』の中にも、

「十界各々本覺おのおのの十如是なれば、地獄いちによも仏界けつじょうも一如なれば、成仏決定するなり」(同 一八〇四〇)

と、このような御文があります。この意を取っておられるわけでありませう。

「此の十界は一念より事起ことり、十界の衆生は出で来たりけり。此の十如是と云ふは妙法蓮華經にて有りけり」

すなわち、一念三千の原理の上から言えば、十界は一念から生じ、その一念の様々なる迷悟の違いによって十種きょうがいの境界、すなわち十界の境界が現れるのであります。その諸法の実相は、そのまま妙法蓮華經であるということでありませう。

したがって、いかなる境界の者であっても、妙法蓮華經を聞かしめることによって成仏をしていくということでありませうから、

「此の娑婆世界は耳根得道にこんとくどうの国なり」(御書一〇九〇一四行目)

つまり、この娑婆世界は耳で妙法を聞くことによって成仏ができる国土であると、このようにおっしゃっているのです。

よって、折伏に当たっては、いかに相手の反対があろうとも「大聖人様の仏法でなければ、本当の幸せは築けませんよ」と、きちんと相手の耳に届くように話をしていくことが肝心です。そのようにしないと「耳根得道」ではなくなってしまうということでありませう。

次に、

一念三千法門

百千合はせたる薬も口にのまざれば病やまいも愈いえず。蔵もに宝もを持てども開く事を知らずしてかつへ、懐ふところに薬もを持ても飲まん事を知らずして死するが如し(御書一一〇〇一六行目)

これは言うなれば、実践が大事であるということですから。大聖人様の仏法は実践の仏法ですか

ら、事^じを事^じに行じていくという意味があるわけです。爾前迹門は理の仏法、理屈ですから、まさに理行の題目であります。それでは末法の衆生は成仏をしないのです。

我々の信心というのは、実践体験の世界なんです。この御妙判の通りに、折伏は自らが行じていくということが大事であります。

先ほども言いましたが、折伏は「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」ということが肝要であるということになるわけであります。

では、次にまいります。

一念三千法門

「此の経は専ら聞^{もつ}を以て本^なと為す」

これは、先ほど言った「聞く」ということです。そして、

「凡そ此の経は悪人・女人・二乗・闍提^{せんたい}を簡^{えら}ばず」

この悪人・女人・二乗・闍提などをすべて簡ばないというのは、差別をしないという意味です。

「故^{かい}に皆成仏道とも云ひ」

これは『方便品』の中の、

「一たび南無仏と称せし 皆已に仏道を成じき」(法華経 一一八^じ)

という、この文のことを言っているのです。すべての者を必ず成仏せしむるというのが妙法蓮華経の最も勝れた所以^{ゆえん}であります。しかるに、それもあくまで聞くということ、聞かしめることが肝心であるということです。

「又平等大慧とも云ふ」

この「平等大慧」とは、すべての者を平等に利益^{りやく}するということで、これは仏様の大きな智慧をいうのです。ですから、悪人や女人であろうと、二乗や一闍提^{いつせんたい}のような者であっても、差別せずすべての者を平等に成仏せしめるということです。

「善悪不二・邪正一如と聞く処^{ところ}にやがて内証成仏す」

ここに「善悪不二」とありますが、これは善と悪が一体不二であるということです。すべての事象は十界互具・一念三千の当体でありますから、善と悪の両面^{そな}を具えているわけです。それから「邪正一如」とは、正も邪も本来的には不二であるということです。したがって、善悪不二・邪正一如と聞くところに「内証成仏」、つまり衆生が心の内に真理を悟って成仏するということでもあります。

これは言うなれば、即身成仏と同じ意味であります。即身成仏については法華経の『提婆達多品』の中にも、八歳の竜女が即身成仏を遂げたことが説かれているのです。これは大聖人様も伝教大師の言葉を引かれて、

「能化所化俱に歴劫無し。妙法経力即身成仏す」(御書 一四九九^じ)

と仰せのように、この功德が妙法蓮華経の中に存しているということでもあります。

ですから、

「故に即身成仏と申し、一生^{しょうとく}に証得するが故に一生妙覚と云ふ」

この「一生妙覚」とは、一生の間に妙覚の位に入ること、一生成仏と同じ意味であります。大聖

人様の仏法においては、皆、久遠元初の妙法を覚知して成仏に至るといふ大事な意義があります。そこで「一生妙覚」といふことを、ここにおっしゃっているわけでありませう。

したがって、これらは妙法を聞くところに「皆成仏道」「平等大慧」、それから「内証成仏」「即身成仏」「一生妙覚」といふ大きな功德が存するといふことをおっしゃっているわけでありませう。

「義を知らざる人なれども唱ふれば唯^{ただ}仏と仏と悦び給ふ。『我即^{がそくかんぎしよぶつやくねん}歡喜諸仏亦然』云云」(御書一〇〇一四行目)

この「我即歡喜諸仏亦然」の文は、法華經の『見宝塔品』の中に、

「此の經は持^{たも}ち難^{がた}し 若^もし暫^{しばら}くも持^{われすなわ}つ者は 我即^{またしか}ち歡喜す 諸^{またしか}仏も亦然なり」(法華經 三五四)

とある文であります。ですから、この法を聞いて受持していくといふことは、まさに仏様も喜ぶといふことでもあります。

そこで「義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ」とありますが、これは義を知らない人であっても、御題目を唱えていけば必ずその功德が具わってくるといふことです。このことは、他の様々な御書の中にも説かれています。

妙法蓮華經の意義が解った上でなければ、御題目を唱えても意味がないなどといふのは、これは間違った考えであります。義を知らずとも、御題目を唱えていけば必ずその功德が、我々に具わってくるわけであります。

御妙判の中には、

「耆^ぎ婆^ばが妙^{みょう}薬^{やく}誰^{わきま}か弁^{これ}へて之^{これ}を服せん」(御書 一一一四)

といふ御文があります。この「耆婆」といふのは、釈尊の在世当時の名医であります。その耆婆が調合した薬を飲んでいけば、自然に病は治っていくのです。あるいは、赤^{あか}子^こは母親の乳を飲むわけですが、そのときに「これはどんな成分で、栄養分がどうだ」などといふことは判りませう。ただひたすら信じて飲んでいけば、必ず身を養っていくわけです。このように、たとえその義を知らなくても、我々は「南無妙法蓮華經」と、御本尊様に向かつて無二の信心をしていけば、必ず功德が具わってくるのです。

したがって、小さなお子さんが、お父さんやお母さんと一緒に、小さな手を合わせて「南無妙法蓮華經」と唱えていく中に、実はすばらしい功德が存しているのです。

そして、そういう子供たちがたくさん集まってくると、今の世の中のような、おかしい問題は全部起こらなくなるのです。今、子供に対する様々な問題が起きていますが、あのようなことも全部なくなるのです。御題目をしっかりと心^{しん}田^{でん}に植えていけば、日本乃至世界の各地で起こっている様々な問題は、戦争をはじめ何から何まで全部がいつに解決するのです。それが「立正安国」の精神であります。

したがって我々は、子供を育てていく上での普段の家庭教育においても、たとえ義を知らなくても一緒に勤行をし、御題目を唱えさせていくといふことが大切なのです。そういう子供たちが成長していくと、ますます大聖人様の仏法は繁栄し、世界平和も夢ではなくなっていくのです。それ

には、我々一人ひとりが本当に信心を強くして、しっかりと法統相統ほつとうをしていくことが大事であると思います。

次が、

十法界明因果抄

であります。

「法華經に云はく『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○常に地獄じよに処すること園觀おんかんに遊ぶが如く、余の惡道おの しゃたくに在ること己が舍宅の如し』文」

これは『譬喩品』の中に説かれている文であります。この真ん中にある「○」の印は「中略」という意味で、大石寺版の法華經で『譬喩品』の文を見ると、その前後の經文の間が四ページほど省略されているのです。

そこで「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば」というのは、もしもこの法華經を信じないで毀謗するならば、ということです。それから「常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く」とは、必ず地獄に墮おちるけれども、自分では御殿ごてんや高樓こうろうで遊んでいるように、そこから出ようとしなないということです。また「余の惡道に在ること己が舍宅の如し」とは、その他の惡道にあっても、自分の家にいるように思い込んでしまっ、その地獄の苦しみから出ようとしなないということでもあります。

人間には「慣れ」というものがありますから、これは非常に恐ろしいんですね。ですから、信心から退転して不幸になっていっても、その不幸な境遇に慣れてしまうと、そこから出て行こうとしなない、そういう心が出て来てしまうのです。

よく世間でも見かけますが、常識から見れば「何であの人は、もっとしっかりと働かないのだろうか」と思うような人がいます。ところが、その人にとってみると、それは別に特別なことではなくなっているのです。「いや、私はこれで満足しているんですよ」というようなことで、向上心を失ってしまっているわけです。

これが信心の世界であったならば、大変なことですよ。例えば、三惡道の中にいても、自分が三惡道にいることを忘れてしまっ、そこから這はい上がろうとしなないということになるのです。

これは何かと言え、まさしく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば」ということなのです。正法そしを謗ると、このようなことになってしまうのです。向上心がなくなってしまうわけです。まさに「常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く、余の惡道に在ること己が舍宅の如し」とあるように、三惡道にいながら満足してしまうような、そういう恐ろしい境界きょうがい、命になってしまうわけです。ですから謗法はこわ怖いのです。

したがって、それを打ち破っていかなければだめだということを、大聖人様がおっしゃっているわけでもあります。

しかもこの後に、

「慳食・偷盜等の罪に依よって餓鬼道だに墮おすることは世人し やす知り易し」

とあります。この「慳食」というのは、物を惜しむことです。それから「偷盜」とは、他人の物を盗むことです。このような罪によって餓鬼道に墮ちるということは、世間の人もよく知っていることと仰せです。

しかるに、

「慳^{けん}貪^{どん}等^{ども}無^もき^も諸^{もろ}の善^{ぜん}人も^{また}謗^{ぼう}法^{ぽう}に依^より亦^{また}謗^{ぼう}法^{ぽう}の^{しん}人^{ごん}に親^{しん}近^{ごん}し自^そ然^{ぜん}に其^その義^ぎを信^{しん}ずるに依^よって餓^が鬼^き道^{だう}に墮^{だう}することは、智^ち者^{じや}に非^あざれば之^{これ}を知らず。能^よく能^よく恐^{おそ}るべきか」(御書二〇八^ぢ一行目)

と仰せであります。『頭謗法抄』という御書の中には、

「大阿^{だい}鼻^{あび}地^ぢ獄^{じやく}とは、又^{また}は無^む間^{けん}地^ぢ獄^{じやく}と申^{まを}すなり(中略)七^{しち}大^{だい}地^ぢ獄^{じやく}並^{なら}びに別^{べつ}処^{じょ}の一切^{いっけつ}の諸^{しよ}苦^こを以^{もつ}て一分^{いっぶん}として、大阿^{だい}鼻^{あび}地^ぢ獄^{じやく}の苦^く、一^{いち}千^{せん}倍^{ばい}勝^かれたり」(御書 二七^ぢ八^ぢ)

と、無間地獄の苦しみというのは、それこそ他の七大地獄の苦しみとは比較にならないほど、まことにもって大苦であると示されております。

そこで、この無間地獄にはどのような罪を犯した者が墮ちるのかと言え、それは同抄に、

「業^{ごう}因^{いん}を云^いはゞ、五^ご逆^{ぎやく}罪^{ざい}を造^{ぞう}る人^{にん}此^{こゝ}の地^ぢ獄^{じやく}に墮^{だう}つべし」(同)

と、まず五逆罪を犯した者が墮ちることを挙げられているわけです。それから、この五逆罪を犯した者の他にもう一つ、

「問^{もん}うて云^いはく、五^ご逆^{ぎやく}罪^{ざい}より外^{ほか}の罪^{ざい}によりて無^む間^{けん}地^ぢ獄^{じやく}に墮^{だう}ちんことあるべしや。答^{こた}へて云^いはく、誹^ひ謗^{ぼう}正^{しょう}法^{ぽう}の重^{じゆう}罪^{ざい}なり」(同 二七^ぢ九^ぢ)

と、正法を誹謗する者が無間地獄に墮ちるということを挙げておられるのです。

そして、この誹謗正法の罪は、

「懺^{さん}悔^げせる謗^{ぼう}法^{ぽう}の罪^{ざい}すら五^ご逆^{ぎやく}罪^{ざい}に千^{せん}倍^{ばい}せり。況^{いわ}んや懺^{さん}悔^げせざらん謗^{ぼう}法^{ぽう}にをいては阿^あ鼻^び地^ぢ獄^{じやく}に出^いづる期^きかたかるべし」(同)

と、謗法の罪を懺悔しても、その罪は五逆罪よりもはるかに重いことを御教示されています。

ところが世間の人は、この誹謗正法の罪ということを知らずに、謗法を犯しているのです。我々は信心しているから、それが謗法であるか否かが見抜けても、世間の多くの人たちは、謗法が謗法であることさえ知らないのです。ですから、我々はその方々に「あなたの行っていることは間違いですよ」と、教えていかなければだめなのです。相手の耳に触れさせていかなければならないのです。これが先ほどの御文に「耳^に根^{こん}得^{とく}道^{だう}」とあった、相手の耳に妙法に触れさせることなのです。これが折伏なのです。

ですから、ここに「慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮する」とお示しのように、謗法の人に近づいて、いつの間にか、その義を信じてしまうことによって餓鬼道に墮ちてしまうのです。

このことは「智者に非ざれば之を知らず」とあるように、信心している我々は知っていても、他の者は知らないわけですから、これを知らしめていくというところに折伏の慈悲行が存するわけです。

ですから、人が溺^{おぼ}れているのを見て助けない人がいないように、我々も、知らず知らずのうちに誹謗正法の罪を犯してしまっている人たちを救っていかなければならないのです。それが我々法華講衆^{つと}の務^{つと}めなのです。

一人ひとりが本当に声を大にして「あなたの行っていることは間違いですよ」「創価学会を信じて『ニセ本尊』を拝んでも功德はありませんよ」と言ってあげる。相手が抵抗しようがしまいが、言ってあげることが大切なのであります。

こういったことが折伏の源流になればならないと思います。我々の信心の根底になればだめなのです。ですから、我々はこのことをよく知らなければならないということでもあります。

では、次にまいります。

唱法華題目抄

「末代には善無き者は多く善有る者は少なし。故に悪道に墮せん事疑ひ無し。同じくは法華經を強ひて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか。然れば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事諍ひ無き者をや(御書二三一〇九行目)

末法は本未有善の衆生でありますから「末代には善無き者は多く善有る者は少なし」と示されています。「故に悪道に墮せん事疑ひ無し」。よって皆、知らず知らずのうちに謗法を重ねていつて悪道に墮ちてしまうのです。ですから「同じくは法華經を強ひて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか」と仰せられるのです。

この「毒鼓の縁」というのは、涅槃經の中に説かれています。これは毒薬を太鼓に塗り、それを大衆の中で打つことによって毒薬が蔓延し、その毒に当てられて皆、死んでしまうということを、正法を聞こうが聞くまいが、その法を聞いたことが縁となって得道することができるという譬えにしているわけです。ですから、この毒鼓の縁というのは逆縁でもあるわけです。よって、相手がたとえ反対したとしても、この法を強いて説いていかなければならないということなのです。

「然れば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事諍ひ無き者をや」。この「謗縁」とは、いわゆる誹謗することによって縁を結ぶということでもあります。

大聖人様の『上野殿御返事』(御書一三五八〇)の中にも有名な逆縁成仏の話があります。

これは天竺の話ですが、亭主に対して非常に嫉妬をしている女の人がおりまして、その亭主を憎むが故に、亭主がいつも読んでいる法華經の第五の巻を取って、両足で散々に踏みつけたのです。そして、その後、女の方は命が尽きて当然のごとく地獄に行くことになったわけです。ところが、その女の方を地獄に入れようと、獄卒が鉄杖をもって打つのですが、どうしても両足だけが入っていかないのです。それは、なぜかと言えば、この両足が法華經を踏みつけた逆縁の功德によって地獄に墮ちなかったという、このような話が説かれております。ですから、謗縁を結ぶということも大事なのです。

創価学会員を折伏するときなどは、お互いに争いもなく、うまく話がまとまって、すんなり折伏が成就するという事はなかなか難しいでしょう。やはり、相手からいろいろと非難・中傷をされるわけですが、それでも強いて法を説いていくということが大事なんです。そのときは、たとえ反対をしていますが、謗縁を結ぶことによって、いずれは必ず成仏するのです。ですから「謗縁を結ぶべき時節なる事諍ひ無き者をや」と、毒鼓の縁を結んでいく時であるとおっしゃっているのです。

基本的に一切衆生は皆、仏性を具えているわけです。その仏性が妙法を聞くことによって、仏

性が仏性としての用^{はたら}きをするわけです。ですから、相手の命に内在する仏性を呼び起こしてあげる、つまり縁を結ばなければだめなのです。

大聖人様は、

「三因^{いえど}仏性は有り^あと雖も善知識の縁に値はざれば、悟らず知らず^{あら}顕はれず。善知識の縁に値へば必ず顕はるゝが故に縁と云ふなり」(御書 一四二六)

と仰せられております。仏性は、縁に値わなければ「悟らず知らず顕はれず」なのです。この妙法の縁に触れさせることが、その人の命に内在する仏性が顕れるきっかけになり、そしてそれが逆縁となって成仏していくのです。このことが大事なのです。ですから、このことを「謗縁を結ぶべき時節」であると仰せられるのです。

そもそも末法の衆生は本未有善でありますから、友好的に「信心しませんか」「はい、判りました」などと言って入信することは考えられないわけです。そうであれば、折伏などしなくても^{しよじゆ}撰受でいいことになってしまいます。けれども、そうではないのです。やはり末法の我々は、折伏を行じていくことが何よりも大事なのであります。

今、申し上げました通り「一切衆生^{しつう} 悉有^{しつう}仏性」、誰でも必ず仏性を持っているのです。仏に成る素質は、十界互具の法門に説かれるように全部持っているわけです。その仏性を呼び起こさんがために強^しいて説き聞かせていく、それが折伏なのです。

折伏というのは、先ほどの経文にもありましたように、仏の使いとして一切衆生救済の大きな慈悲を持って行じていくことです。まさに仏の所遣^{しよけん}であります。

どうぞ皆様方には、折伏ということは自分自身にとっても、過去遠々劫以来のあらゆる罪障を消滅していく、すばらしい功德の存する尊い仏道修行であるということをよく知っていただいて、支部にお帰りになりましたら、しっかりと折伏していただきたいと思う次第であります。

テキストには、この他にも大事な御文をたくさん挙げてありますので、あとはお帰りになってから拝読してください。これを一生懸命に拝読していただければ、いかに折伏が大切であるかがお判りになると思います。

私が今回、要文を挙げさせていただいた理由の中には、「折伏をなさい」ということは、私が言っているのではなく、御本仏大聖人様がおっしゃっているんだということ。それから「折伏の功德はこれほど大きく尊い修行である」ということを仏様がおっしゃっているんだということ、要文を通して皆様方にお伝えしたかったのです。そこで今回は、要文を抽出^{ちゆうしゆつ}してテキストにした次第であります。

皆様方には、これを拝読せられまして、大聖人様が我々に「折伏せよ」と仰せられているんだなということ、ぜひとも感じ取っていただきたいと思います。このことを心から願う次第であります。

皆様方のいよいよの御精進を心からお祈りいたしまして、本日はこれを持ちまして私の講義を終了いたします。